歌集

# 白き州道

瀬崎涛声

新星書房

白き州道

瀬崎濤聲

# 序

瀬崎涛声氏はいまブラジルから日本へむかって航海中であり、桜の花盛りの四月上旬には東京へ来られ、私は初対面の機会を得ることになっている。

氏はブラジルの歌壇に重きをなす人だという。酒井繁一氏を通して「まひる野」に入会を強く希望されたのは数年前のことで、それ以来、休むことなく歌稿を寄せて来られた。昭和八年ブラジルに渡り、農園を経営し、三十余年ぶりで帰国されるにあたって、第一歌集『白き州道』の刊布を発意、その出版事務を依嘱されたので、私はよろこんでお受けし、序文をも草する因縁をもつこととなった。

ここに収められた作品は、初期のものから「まひる野」入会以前まででうち切られ、それ以後の作品は、やがて第二歌集として編む計画をたてていられるようである。私はこの歌稿によって、はじめて氏の長い作歌活動を知り、氏の生活経歴にも接したのである。

昭和八年、日本の不況時代にブラジルに渡り、新生活の開拓に立ち向かわれたのは、私が学窓を離れたときである。私よりは十五歳の年長者であるが、それ以前および以

後の作歌生活の時代的背景は、私にも十分に理解できるものがあり、わがことのように身に恥みて味わい、多難な一人の生活記録として温しみを覚えたのである。これは私どもの世代には共通の世界であると思う。

青年期に画家を志望されたというが、その資質は集中の作品にも特色となっているのが注目される。ブラジルの風土、動物や植物が、愛情をもって歌われている。この歌集の時期の大半は苦難にみちた闘いであったと想像されるが、それらは直接に歌い出されず、作品の中に気分として敵かしこまれ、陰翳となっている。それがこの歌集の文学的特質であり、氏の歌人としての本領であろうと思われる。

作歌態度については、後記に発言がある。年齢的には若くはないが、精神的な若さはこの一巻に知ることができる。氏は歌うべきものをいまだ多く蔵されているはずで、今後の作歌活動に期待をかけるのは私のみではなく、この歌集の読者のひとしく思うことであろう。祝福の心を寄せて序文とする。

昭和四十年三月一日

窪田章一郎

# 目　次

静　樹　　大正十年　ー　大正十四年
雨晴れて
病中辞職をせまられて、
門さきの
畑近き
木槿
工場の三階
荒川堤
亡児
初詣

大　地　　大正十五年　ー　昭和五年
庭木
雨あがり
青海苔
鈴蘭の花
漬梅の壷
秋枇杷
一夜漬
雲形

歩みきて
紋白蝶
庭木の花
木工機
木版画
稼ぐ
分娩
輪卒
木の芽

昭和八年ー昭和十四年

渡　伯

支那海
丘の枯木
遠雷
狼
木の花
いなづま
夕されば
逝く秋
帰国など
この頃は
去りゆかむ

日照雨
岡山裾

旅をゆく　昭和十五年～　昭和二十二年

秋より冬へ
州境
新月
今朝の春
街ゆ帰りて
朝の牧原
絶壁
草の山
朝焼けて

我が土地　昭和二十二年　～　昭和二十九年

山里
裏山
夜霧
陶器性の音
新屋
秋
海岸山脈

聴き居りて
病床吟其他
白雲の海
嘲り
白き州道、
木履
押されつつ
見ゆる限りは
白ききのこ
灰皿に
死の像
後記

まひる野叢書第十七編

# 白き州道

静　　樹　　大正十年！大正十四年

雨はれて

三月越しいえぬ病にこしかたを顧みすれば居るに
居られぬ

青黒み樹々静もれる朝空に動くともなき
鱗雲かも

病中辞職をせまられて

馘首せられむ事を悲しみ病みほけし身もて勤めす
貧しき我は

事なべて今は仇なれそれとなく辞職せまりに人の
来れる

かかる日もあらむと期せし身なれども更めて聞けば

驚かれぬる

かなしさを堪ふとすれど妻が眼の涙を見れば
胸は波うつ

勤めなどすまじきものと今更に嘆けど我は
貧しきものを

あてにせし勤口皆断らるる夢みてさめし
朝のさびしさ

雨零れて夕陽てれれば東の空に虹見ゆと
子等の騒げる

田の畔をよぎる小径にうとましき羽虫の群の
多き夕暮

門さきの

門さきの桐の葉を吹く涼風に心も軽く入るよ
昼湯に

ねまりゐて見るはあまりにかしこけれ月暈（つきかさ）
かけし十五夜の月

床の上に構たはりつつ切抜きの歌みる癖のつける
此のごろ

殊更に今宵しじなる虫の音をいねがてにしも聞きて
ゐるかな

降りしきるこの朝雨も勤（つとめ）せぬ身は朝床に
聞きて安けき

暮れせまるこの庭隈に黒々と繁り葉ひそめ立てり
椿は

ややにして頭をもたげ前足をあはせて揉めり
蝿の奴（やっこ）は

降り入りし雨のさ中を我がゆけば心おのづと
澄み湛へたり

向つ橋渡る荷馬車も馬方もおぼろかに見ゆ
雨の強きに

畑近き

気にしつつ二日惰（なま）けし葛飾の友への返事
今宵かくなり

弟の起ち居ふるまひ悉く父に似たるが
さびしかりけり

この朝は霜つよからし明け近くさめし肩先ひえ
わたるなり

雨具持たぬ外出の妻を気づかひて心当りに電話かけたり

畑近き薮かげ行けばほのかにも真闇に肥料（こえ）のに
はひ来るなり

撰りに撰りて漸く買ひし古本のツルゲーネフの
短篇集よ

誇りかに友に語りしひとことの今はづかしく
耐へられなくに　病中六首

弟の起ち居ふるまひ悉く父に似たるが
さびしかりけり

この朝は霜つよからし明け近くさめし肩先
ひえわたるなり

雨具持たぬ外出の妻を気づかひて心当りに
電話かけたり

畑近き薮かげ行けばほのかにも真闇に肥料（こえ）の
にはひ来るなり

撰りに撰りて漸く買ひし古本のツルゲーネフの
短篇集よ

誇りかに友に語りしひとことの今はづかしく
耐へられなくに　病中六首

寒々と隙間もる風に乾きしるき土の匂ひのにほひたるかも

厠がへり破璃戸すかして眺めやる雨の夜空は
ほの明きかも

晴れぬればかならず風の吹き起る日癖佗しき
この日頃かな

ゆくりなく見出でし鳥のみそさざい朝の溝べに
あらはなるかも

このぬくき浅夜しづかに地震（ない）ゆれついよいよ
雨は降り来るらし

木槿

うら庭の藤根の木槿明るくも芽ぶき揃へりけふ
出でて見れば

のびのびと手足さし伸べ大いなる欠伸をしたる
心安さよ

弟と妻のいさかふ洩れ聞きてとみにこころのいら
立ちにけり

照り強き土用の入りや窓さきの桐の広葉の
ゆれも重たく

静やかに月はのぼりぬ寝ながらに見て居る前の
屋根の真上に、

ふと見れば白き木槿の花ひとつさやかに咲けり
夕暮の庭に

工場の三階

めづらしく裏の工場の三階にこよひ灯の見え
話し声きこゆ

昼たけて吹く風つよみ向つ峰（を）のなぞへの
木叢立ち騒ぐ見ゆ

江戸川公園三首

登りつめ疲れて憩ふ耳に聞く松ふく
風の音のすがしも

のぼり来て木の間がくりに見はるかす地平線の
あたり秋霞せり

いま一度いま一船と着く船に心せきつつ
君待つ我は　　言問渡

さやかなる月の光に心うきて立ちいづる
町に夜霧こめたる　　寺島

井戸端に靴洗ひっつ見上げたる真蒼き空に
昼の月あり

裏庭の薮のしげみにこの年も咲き出でにけり
木槿の花は

この家の木槿の花の大きさよ籬より高くのび
て三つ咲き

轡虫の声きき居れば思ひ出づる故郷の夏の
なつかしきかな

荒川堤

とある辻を曲りて見れば思はぬに荒川堤は
眼の前にあり

とこどころ草黒々と焼かれたるかの土堤の上に
ゆきて見まほし

冬の日の午後の町なか歩みつつ気にかかるかも
我の素足の

理髪屋の寝椅子に居れば行きつけの風呂屋の高き
煙突の見ゆ

曇り空雪ともならで風強く冷えしるきかも
この二三日

ひるさがり裏の枯木に居る雀尾ふり首ふり
やすむ間もなき

朝なあさな勤め通ひの汽車ゆ見つ飛島の山に
消え残る雪を

春浅き沼田の畔に芹つみの少女等見えて
うららけきかも

日並べて寒けき風の吹くものか昨日も今日も
晴れわたりつつ

寒々と風吹き立てばこの川のはるかの
土堤に埃立つ見ゆ

切抜きの歌読み居れば忘れゐし我が歌をふと
思ひ出したり

停車場を出づれば前にそそり立つ丸ビルの上に
一つ星見ゆ

我もつひに親とはなりぬしみじみとおろそかならぬ
我とし思ふ

## 亡　児

授乳中生母の許を離れなければならなかった運命の
我が稚児なりき

ま白木の位牌の前に座り居り幸うすかりし
児とし思ひて

新らしき位牌の前に坐し居ればただ悲しくて
涙しながる

ああ斯くて汝去りゆかば永遠に見む日はあらじ
見む日はあらじ

何事も汝の為めにと忍びては過ぎ来し我ぞ
泣かざらめやも

今朝吾子のゆめを見にしが夢にまで悲しや
吾子は熱ありにけり

吾子生きてあらばと思ひ偲びつつ見る店頭の
小さき夏服

初　詣

初詣終へており立つ外苑にそこはかとなく
落ちし松かさ　男山八幡宮

暮れなづむ遠山脈を眺めつつ何かはかなき
心地なりけり

今朝寒く曇れる空のひとところさけて
真蒼き空の見えたる

竜間山わが越え来れば山腹の松のほづえに
頬白なけり

年毎にこの庭隈に咲き出でて親しくもあるか
山茶花のはな

尿すと崖を見上げてゆくりなく山藤の花を
見出でぬ我はも

冬田越し当麻の寺のあらぎを遠目に見つつ
下田道ゆく

この寺の松の枝ぶり皆低く下枝は重りて地に
とどきたる

法隆寺

籠り居の心いぶせみ戸を押せば夕空とほく
わたる鳥見ゆ

暖かに日はのぼりゐて槙の木の葉をくきやかに
壁にうつせり

見はるかすけ長き川は淀川か川洲あらはに
流れたる見ゆ

小夜更けて物書き居れば戸の外に猫がまた来て
水なめる音

さ夜ふけを妻はも何を思ひけむ棚掃除などなし
始めたり

貧しかる我等の為めの叫び声きくもうれしく
心躍れる

普通選挙演説会

## 大　地

大正十五年―昭和五年

### 庭　木

今朝寒き雨に濡れたる庭木々のさやに映れる
にはたづみかも

めぐり来し御堂の裏のひそけさよ時折鳥の枝
うつる音

めづらしき大雪なれば寒けれど窓開けはなち
朝餉して居る

あかときの向つ山根にひとところ白く光るは
沼にかもあらむ

のぼり来しこの古寺の塀越しに見えてま白き
もくれんの花　　奈良

新月のひかりさし来て手洗鉢の下のタタキの
濡れ光りたり

この花街（まち）の春の踊りの始まりて提灯
あまた吊されたるも　　大阪南地

今朝もまた来てゐる客は女なりのれんの裾ゆ見ゆる
白足袋　雇人口入所

雨あがり

この日頃とみに目立ちて青み来しこの裏庭の
岩苔のいろ

起きいでて我が掃く庭のこぼれ葉にまぢりて
赤き山茶花のはな

雨はれし朝の風の心地よさきよらけき街の
舗道をゆくなり

朝の雨あがりて間なき砂地道はやも乾きて
埃立つ見ゆ

明日は休み日なればねむごろにズボンは折りて
隅に置くなり

明日こそは風呂にゆかむと思ひっつ汚れし
足を拭きて我が居り

初対面の一碧楼の親しさよ我にねむごろに
礼は返せり

海紅俳句会

## 青海苔

しみじみと今朝ふる雨にぬれそぼち椿の
花の色立ちて見ゆ

我が前を切りたての花さげてゆく洋装の娘の
あらはなる足

船おりてゆくにぬくとき日の光りそこはかとなく
魚の匂ひす

淡路島四首

青々と凪ぎ静もれる海の面や、白き水母の
浮き泳ぐ見ゆ

真昼陽のしみらにさせる磯岩の海苔青白く
乾きてゐるも

干潮にあらはれいでし此の磯の群岩が
みなつけてゐる青海苔（のり）

白雲の中ゆく敵の飛行機の影あざやかに
雲に映れる

防空演習二首

上になり下になりつつ敵機追ふ味方の飛行機
時々光る

しみじみと湯に浸りつつ夕風にさやげる庭の
青葉見てゐる

絶え間なきこの街中の物の音ふとと絶えたる
真静けさなり

階下（した）の客去なば行かむとひたすらに
溜りしゆまり堰へて我が居り

さびしきはふけゆくなべに我が顔の亡き弟に
似てきたること

夏真昼をみな子いでて物干に衣干し居り
まぶしがりつつ

漬梅の壷

きて見れば村社の庭は秋萩の花咲き荒れて
人影もなし

枚方二首

探ね来し百済王家の址どころ林の中に
礎石残れり

漬梅の壷とりだして夜ごとにうち眺め
ゐる嬬（つま）はたのしげ

夏真昼をみな子いでて物干に衣干し居り
まぶしがりつつ

そのかみの我が恋人はやくざ夫持ちて苦労し
ゐるとよ今は

見てゐるは朝顔棚に陽をよけしスッポン料理
店の裏口

蒸暑きゆふべを強くだしぬけに降りいでし驟
雨のいさざよき音

真青な八ツ手を積んでトラックが突っ走りゆ
く朝の街道

氷屋だ明るい店だ切りたての赤い西瓜のみづ
みづしさだ

## 秋枇杷

夕づきてここには早も陽がささず何がなさびし秋枇杷の花

ゆふされば日かげり早き山畠ほのかに白く枇杷の花見ゆ

通されしうす暗き部屋卓上の壷には枇杷の花活けてある

谷氏宅二首

卓上の壷にさされし枇杷の葉につめたき空の光あり昼

秋晴れの苅田の畔を歩みつつしみらに嗅げり干稲の香を

草臥れて寝ころびたれはひんやりと青草の冷えが身に徹りたり

## 一夜漬

一夜漬つけむと妻がきざみゐる赤人参の色のあざやか

幹あかき竹たわみゐる眼下なる真竹の薮はひそかなるかも

竹内峠三首

山上に時雨ききつつ食みてゐるこの海苔巻の飯のつめたさ

山上の茶屋の万年青の朱き実を見つつつめたき握飯喰ふ

起きいでて見れば庭には冬青の木のこぼれ葉
青し今日も雨なり

ともすれば雨かと思ふ隣家のうらの流しの捨
て水の音

石垣の湿り探かるところだけ草青々と生えて
ゐるなり

雲　形

一頻り雪ふり晴れて冴えすめる空の青さよ木
の間より見ゆ

起きいでて来りし朝の流し元ほうれん草青く
洗ひあげてある

大阪氷業組合二首

ひる日ざしほつかりとある流し場の米磨ぎ桶
はほの温みをり

風呂抜きし嗅ひほのかに漂へり春の夜更の街
を来ぬれば

眺めやる武庫山肌にくっきりと雲形ありて今
日も晴れなり

しぐれ雨時折すぐる山畑の葡萄もみぢの濡れ
てあざやか

堆肥（つみごえ）のほのかに臭ふ納屋の隅に鶏ひっそりと
卵うみ居り

道端に新築されし家のあり割竹塀のいろのま
青さ

人込みに押されて我にもたれきし女の体の柔
かさなり　　車内

さ夜ふけを目醒めて居ればひそひそと春めく
雨の降り出でにけり

歩みきて

歩みきて心さびしくなりにけり日蔭畑の秋び
わの花

道ばたに投げ出してある生真木に春の淡雪つ
もりゐるなり

窓外は風荒るるらし貯水池の波しらじらとうそ寒く見ゆ

起きたての我が眼の前にひんやりと漬物石のぬれ光りをり

ほうれん草濡れてま青き流し場の朝をしみじみ顔洗ふなり

春浅き崖下みちに細々とけむる焚火のたきすててある

当麻寺附近

春の日はとっぷり昏れて川向うに黒々として尾根つらなれり

集会（つどい）より逃れてしばし夕せまる庭の樹かげの
静けさにゐる

通りゆくトラックの地響感じつつ壷の菜の花
咲きすぎにけり

紋白蝶

紋白蝶かがやき飛べり梅雨ばれの日照り明る
き庭木の上に

紋白蝶きてはとまれる庭先の冬青の木の花散
るしづかなり

庭近くもの書き居れば冬青の木の花ほの甘く
匂ひくるかも

むらさきの桐の花咲くはつなつの村の親しさ
春蝉のこゑ

能勢明見詣

軒端より仰ぐゆふべの空明り電線幾本くきやかに見ゆ

道ばたに喰ふ弁当のひえびえし生柴負ひて村人がくる

竹内峠附近

庭木の花

梅雨ばれの庭の日差しの明るさよ鰯ふれくる声きこゆなり

豆腐屋をよびに表に走りゆくぬれ手の妻の胡瓜のにはひ

晴々と鰯をふれくる声きこゆ庭木の花のしろく散る朝を

冷やかに青く反りたる地鰯をざるに盛りたる新鮮さなり

赤き旗たれてそよがぬ屋上にぽっちりと一人こちら向いてゐる

ひたひたと瓦にあたる雨の音さびしくなりてまた眠りたり

職違ひの勤めしてゐるさびしさが折々我を憂鬱にする

## 木工機

木工機の急ぎの図面うつしゐる窓下をゆく人
の傘あかり

内職を了へて出づればま昼間のやうな月夜だ
風はつめたい

ひょうひょうと大地を殴ぐる風の音もうすぐ
冬が来たると思ふ

月明の物干場にて振りたるひんやりとした干
柿（かき）の手ざはり

腹痛に堪へゐる妻のかたはらにしゆんしゅん
と湯が沸き立ってゐる

## 木版画

切符貫ふと握りしめてゐたあかがねの銭の温
みよ車掌に渡す

仕送りの礼を心から言ふてゐる父の純情にし
みじみとなる

さっぱりした気持で見入る大鏡の裏の女湯の
朗かな笑ひ

新しい木版画のやうな感じで突つ走つ、でゆく
歳暮（くれ）の夜の電車　　大阪堀江

酷寒をひかへて職を奪はるる職工達の身にも
なって見ろ　　合同毛織馘首

# 稼　ぐ

来るところまで来て仕舞った今は此の女とも
別れねばならぬ

腑甲斐ない子をもって父は淋しかろ泊込みで
労働に行ってゐる

ひとりでに世間を想ひせばめてゐる今の自分
をあはれむ

殺（や）られてゐるのではないかと思ふ不安もり上
った隅の毛布を見つめる

人の来た形跡はなく煮（た）いてある味噌汁鍋はま
だほの温い

分娩の料にと稼ぐ内職のこの苦しさは誰が知らろう

## 分　娩

最後のドライヴのやうな気がしてならない分娩が妻を連れてゆくところ

どうなることかと怯えゐる我をまた脅かす妻のいきみ声だ

なかなか産みおほせない妻の呻吟（うめ）き声聞きながら黙って餅焼いてゐる

はげしい激しい妻のいきみ声いのちががけだと思はせられる

晴やかに笑ってゐるが彼女らも皆分娩の宿命を持つ

人気ない家に帰ってさびしくてさびしくてならぬ雨の日の暮

## 輸　卒

久留米輜重兵第十八大隊

ああ俺は駈足せねならなかったのだ教官が後から怒鳴りつけている

眠くてねむくてならないのに又しても揃へねばならぬ放馬だ

厩勤務

不時呼集だまつ暗闇で手さぐりに巻脚絆をそくさと抱く

なんて故里（くに）の恋ひしい夜明だらう汽車が汽笛
を吹き鳴らして通る

ピシャリと列の外れで音がしたいつもの輸卒
が殴られてゐた

しこたま酒保の饅頭を頬張って鬱憤をやる輸
卒のあはれさだ

馬の手入から帰って朝飯を喰ふ手に残ってゐ
る馬糞のにはひ

やうやく厩勤務を終へて帰ったのに今夜は不
寝番か悲しくなる

## 木の芽

あんなに木の芽は伸びるのにしぶとい俺の病
だいやになって仕舞ふ

いつよくなるか判らぬ俺の病気だ明日より飲
む薬代がない

俺が死んだつてこの大自然には何の影響もな
いなんて淋しいことだ

献身的な心になって先生に飲ませる茶をとり
に行く

詩歌大阪大会

すばらしい感激を残して先生は行ってしまっ
た電飾が息づく戎橋

通信器は「全速」を指示してゐて爛れるやうに
焚き焚かれてゐる汽罐

巡洋艦筑摩

暴風のやうな強圧通風の凄じきだパラパラと
粉炭が顔に吹きかかる

# 渡　伯　昭和八年ー昭和十四年

## 支那海　昭和八年三月移民としてブラジルに向ふ

見てゐるは立つ波白き支那の海くぢらい群れて潮ふける海　マニラ丸にて

うねり上りなだれて白き波の間に背を出すと見れば鯨潮ふく

立つ波の白き沖べに一つ居る鯨と見ればこなたにも居る

目交ひのうねれる海のひとところ騒立つとみ
れば海豚とび出つ

己がじし波をくぐりて躍り上るいるかの群の
一途なるさま

洋（なだ）とほく晴れなぎながらうねり寄る波の太さ
よ揺れしきる汽船

はろばろと洋なぎ晴れて飛魚の群れ光りとぶ
支部の海かも

吹く風をすがしみにつつ見てゐるや赤道のこ
の朝風の海を

赤道を越えりつ思ふ焼け死にはせずやと問ひ
し人の言葉を

赤道を越ゆる朝明け目覚めゐてまだ行先の遥けきを思ふ

寄る波の白き浜べのけ長きを遠目に見つつ我が汽船はゆく

見はるかす長き磯べによる波の砕けて白く煙らへる見ゆ

セイロン島

見つつ行くセイロン島といふ島のよる波白き磯の長きを

橋のま上の星の動くがに見ゆるは汽船の揺れてゐるなり

## 丘の枯木

来かかりし丘の枯木に啄木鳥のほとほとと音を立ててゐる朝

せまり合ふ山の峡ゆ見はるかす州境の山は昼霞せり

風寒き煙曇りのひるさがりおどろおどろと雷の鳴る

つばくらめひるがへり飛ぶこの沢の上にさ青く空は晴れたり

小夜更けて野を越え来れば谷あひの杜に頻りにふくろう鳴けり

木の根焼くけむり静かに立ち昇る開墾畑の春
のたそがれ

春もやのぬくき今宵をしき鳴ける裏山のべの
ふくろうの声

霧しづく落ちて冷たき朝山に心はづみて樹を
伐る我は

朝の日の更けゆくなべに霧はれて木を伐る音
の冴えまさる谷

日ひと日木伐り疲れて憩ひ居る夕べの林トツ
カーノ啼く

トツカーノ啼ける林のゆふぐれを木伐り疲れて帰るなりけり

夕づきて山には早くも日は差さずとみに覚ゆる汗シャツの冷え

日並べて我が伐り伏せし雑木林見つつ親しき仕事の帰り

## 遠　雷

おどろおどろ遠雷の音聞えくる昼の寒けさ木の根掘り居り

木の根掘り夕べとなれば漸くに疲れを覚ゆひと日のつかれ

焼け山の雑木の根株掘りてゐる夕べを寒くふり出でし雨

降り出でむけはひにありて久しくも降らざりし雨の今日は降るなり

ひさびさに降り出でし雨をよろこびて濡れつつ帰る焼け木の匂ひ

久々に降る雨なれば野良仕事早めに止めて風呂沸すなり

久々に今日降り出でし昼の雨バナナ林に音を立てつつ

雨ふらむ気はひの雲の消え去りて吹く風寒き
月夜となれり

桃の花さきて明るきうら庭にネグロに髪を我
が刈らせ居り

狼　三キロ米以内には一軒の人家もなかりき

我が家は野べの孤つ家夜となれば家居ま近か
に狼の鳴く

朝露の岡山裾をよぎるとてはしなく聴けり狼
の声を

久々に今日降り出でし昼の雨バナナ林に音を
立てつつ

雨ふらむ気はひの雲の消え去りて吹く風寒き
月夜となれり

桃の花さきて明るきうら庭にネグロに髪を我
が刈らせ居り

野より野に鳴きうつりゆく狼の声きこえ来る
雨の朝明け

狼のこゑ近づくと聞くほどに杜絶えて今は山
風の音

小夜更けの峯（を）越しのかぜの吹きおろす音にま
ぢれる狼の声

裏山に鳴くよと聞けば早もかも鳴き遠ざかる
狼の声

狼の鳴き近づくと聴き耳をしつつさびしく小
夜床に居り

うら山に鳴き移りゐる狼の鋭声（とごえ）は風のまにま
に聞ゆ

## 木の花

春来ればこの乾きしるきセラーダの焼原にさ
へ咲けり野花は

黒々と焼き払はれし廣原にそこはかとなく咲
ける草花

日並べて向つ山根にうす煙こめて動かず雨近きなり

広々と鋤きかへされし新墾のゆふべの畑を見つつたのしき

セルカ張るこの山際に匂ひくる木の花の香はほの甘きかも

見廻せどあたりに見えぬ木の花のほの甘き香は風にのりくる

野良帰り我が足音に驚きて鶉とび立つ夕ぐれのみち

蒔きつけし黍をあさるとパツサプレット今朝い群れたる背戸の広畑

道の上に咲き垂れてゐる薮蔦の花をすがしみ
見て通るなり

いなづま

たたなはる山脈かけて崩れたる雨雲に時折走
るいなづま

背戸のべの木立ふき揉む夜ながらの春の暴風
雨（あらし）となりたり今は

この夜も更けなば雨かおどろおどろ雷の音つ
ぎてし聞ゆ

雨零れの朝さやけき野に出でて草を技き居れば
サビア啼くなり

アンドリンニョ群れ渡る見ゆ雨近くなりしと
思ふこの夕暮を

我が研げる鍬の柄先のたまさかに触れては散
らすみかんの花を

雨あとの雲垂り低く夜となりてかなたこなた
に飛べる蛍火

ひとしきり降りての後を雨やみて浅夜ひそけ
し蝦蟇のなくこえ

夕されば

いづこより匂ひて来るか昼の野に木を伐り居
れば木の花匂ふ

桃の若葉明るき昼の湯に入りて心安けし日曜
けふは

雨を待つ心久しくあり佗びて聴く雷の音のよ
ろしさ

曇り空くもれるままに夜に入りていやせはし
くも蛙なくなる

春の靄革めてぬくときこの夜を鳴く鳥のあり
月夜ながらに

春嵐日癖となりて背戸のべの木立の音はひもすがらなり

雨零れむけはひの空の夕明りかぜ冷々とサビア鳴くなり

夕されば かならず曇る日和癖こゑしめやかに蟇（ひき）鳴く聞ゆ

啄木鳥は木に居る鳥とのみ思ひしに今日見れば野に下りて漁れる

## 逝く秋

切れぎれに鳴く狼の声起る吹くあさ風のうら山にして

逝く秋の雨の名残りかうばたまの夜空にとほく稲光りする

裏山のなぞへ草原夕されば穂草なびかせ風わたるなり

見はるかす遠山脈に湧く雲も秋さびたれや切れぎれに湧く

ふく風の向う山べの秋草のゆれさびしくも日は暮れにけり

刈りいそぐ陸穂畑のたまさかに翳ると見れば雲よぎるなり

ひたむきに沢の草の根掘りてゐる昼の暑さよサリエーマ鳴く

サリエーマ鳴ける向うの草山の峯にはさせる
夕つ日の光（かげ）

つけ捨てし木の根焼く火の赤々と燃えさかり
ゐる夕闇の中

冬さびし向うの丘の朝更けてサリエーマ鳴く
声透るなり

ほんのりと行手の空の明るきは遠山脈に野火
もゆるなり

我がかつぐ薪の枝にふれて鳴る道草の実の音
のかそけさ

籠り居のこころ佗びしみ見て居るや雨の夕べ
の山越の雲を

葉のひまにあらはに見ゆる桃の実の日に日に
熟れて雨降りつづく

この年は蟻も伐らねば葉を繁み枝もたわわに
なれる桃の実

## 帰国など

帰国など思ひもよらず六年越し生活のことに
追はれ来にけり

出稼ぎの身にしあらねど金を得て人の帰国る（かえる）
を聞けばさびしゐ

年を追ひて世智辛くなるこの国の田舎ぐらし
をさびしとぞ思ふ

いねざめの心果敢しうつしみの淋しき夢を見
てゐたりけり

山ぎわに朝餉し居れば啄木鳥の姿は見えね木
を啄く音

ひろびろと焼きはらはれし焼原にほのかに青
く草は芽ぶけり

夕畑を巡りきたりてゆくりなく鶯の声に似し
鳥を聞く

さかり来て聞けばまことに鶯の声さながらの
夕鳥の声

幼ながら子守させらるる女（め）の童子守の寝言い
へるあしはれさ

長女雅子

放し飼ひの豚が引き水濁すとて母の叱言をけふも聞くなり

川の洲の中の小島に咲きをりて親しくもあるかクワレヅマの花

少しつつ金工面して拓き拓き比の広畑となせしなりけり

はるばると金の工面に来りけり汗まみれなる乗馬（うま）の哀れさ

金出来ず虚しく帰る夕ぐれの道をはさみて燃えてゐる野火

## この頃は

この頃はあぶら草野の花ざかり日に日に空は晴れ渡りつつ

児にゆまりさせて吾が居る夜明けどきうら山のべに狼の鳴く

たまさかに秋の野づらをとび立てる小鳥の羽の日に光る昼

朝まだき床にめざめて我が居るにうら山に鳴く狼のこゑ

むらさきにあぶら草さく野つづきの雑木の林やま鳩の啼く

朝夕に岡山越しに湧く雲の流らふ見れば冬は
来にけり

命あるもののかなしさ焼原の木々明るくも芽
をふきにけり

日並べて野分の風の吹くものか昨日も今日も
空は晴れつつ

あをあをと陸稲畑の刈株の芽ぶきて秋も終り
となれり

あぶら草花さく丘を越ゆるとて野牛の群にゆ
き合ひにけり

## 去りゆかむ

去りゆかむ家のめぐりの秋蘭けてゆふべを寒
くしぐれ降るなり　　転耕せむとして

この年は去りなむ家にしたしみて住める朝（あした）の
こほろぎの声

去りゆかむ思ひさびしく住む家をめぐれる丘
に秋は深むを

秋暑き陸穂畑のひるさがりつむじの風の吹き
しまく音

虫の音の繁き夜頃となりにけり食すものの味
立ちまきりつつ

風上におのれ投げては我が被る米のバーナの
しひなりけり

この年は去りなむ耕地に家居してをれば日に
日に野分ふくなり

丘越しに湧き立ち並ぶ雲の秀にひとときぬ映ゆ
る入りつ日のかげ

山脈に今朝凝る霧のはつはつになびくを見つ
つ岡山を越ゆ

荷を負ひて牧原くれは塩くれに来しと思ふか
仔牛寄りくる

日照雨

日照雨（そばえ）ふる庭に下りきて餌をひらふ山の小鳥
に親しむしばし

尿すと外に出づれば月読のひかりさやかに牛の鳴くこゑ

冷えしるき夕べとなりぬ背戸畑に積藁焚きて子等とあたるも

明け近きくもり月夜の裏庭に木桂の花の仄じろきかも

吹くかぜの寒きくもり日時折に屋根をたたきて降りすぐる雨

まなかひの岡山裾の広原が飛行場とや赤き屋根見ゆ　　カンピーナス

朝たけで向つ山べに湧く霧のひかり煌くまぶしきまでに

降りしげき雨にもあるか米の草採り止め来て
はしやがめり薮に

ほら鳴けりと子供云ふにぞ聴耳をすればまこ
とに狼なける

白々と木槿花さく庭隈に山鳩の毛を子と劣り
居り

二つゐて庭に鳴く虫こもごもに鳴く音徹れり
小夜ふけにけり

岡山裾

朝光の陸稲畑に下り立ちて稲を刈るなり小鳥
は啼くも

刈りいそぐ陸稲畑の畑裾に見えて静けきパイネラの花

秋暑き日を背にうけて刈りいそぐ米田の裾のパイネラの花

稲刈りの朝餉たのしく眺めやる岡山裾のパイネラの花

つむじかぜ過ぎてしづけき畑裾の雑木が中のパイネラの花

こもりゐの佗しくなれば立ち出でて日を仰ぐかもうららけき日を

ページャフロル啼くよ静けき山際の高木の下に朝餉し居れば

トツカーノ群れ渡りゆく比の谷の上に晴れたり朝の空は

何を焼く煙なるらむ向つ丘なぞへに白くあさげむり立つ

うら背戸にどよもす風の聞えくる心さびしき夜半の寝覚めよ

# 旅をゆく　昭和十五年ー昭和三十二年

## 秋より冬へ

秋晴の耕地をゆく汽車ゆ見る丘のなぞへの棉つみの群

さにづらふ処女子達もまじりゐて丘のなぞへの棉摘まれゆく

いで発たむ汽車を待つ間に下り立ちて見てゐる駅の秋の草花　　アンバーロ

山里にゆふべの煙たなびきて家なる子等を思ひ出さしむ

やまなみに雨雲（くも）かき垂れて雨ふれり旱つづき
のこの夕暮を

徒歩わたり手にして靴をはいてゐるこの川岸
の名も知らぬ花

さにづらふ処女まじりの綿摘みを汽車に見て
ゆくこころしたしく

見はるかす広野の原は穂草咲きまことにすで
に秋蘭けにけり

見渡せば丘の平の秋たけてながめさびしも鳶
まひ澄めり

奥地行きの汽車待ちわびて居る駅の朝（あした）を寒く
雨は降りつつリベロン・プレット

日の暮の旅はもさびしさかり来し妻子がこと
の思ひ出されて

小屋構へ邦人らしきコロニヤの汽車より見え
て遠からなくに

此の丘の傾（だれ）れきわまりゐるところ僅ばかりの
米のみのれる

大君のみあれ日今日を我が庭のダリヤ素枯れ
て花一つなき

夕の雨あがりて明るき草山の上かけて湧けり
二重の虹は

しらじらと裏山なだれ吹きくだる雨霧さむく
夜は明けにけり

聞き馴れぬ鳥も来て鳴くうらの山この頃とみ
に冬めきて来ぬ

トツカーノ来鳴く冬べとなりにけり移らま欲
しき土地もあらなく

照曇る背戸の畑に豆曳けば畔木のうれにトツ
カーノ鳴く

起きいでて身はすがすがし夜あがりの雨のあした
の山に対へり

## 州境

仰ぎ見る嶺のなぞへを拓けるは種子馬鈴薯を作る畑とふ

聖州とミナス州との境石石の柱を見て親しめり

見つつゆく尾根のふもとの露天掘りマンガン鉱の採掘場とぞ

ふる雨の尾根の裾べの赫土の試掘の址を見て通るなり

仰ぎみる線の尾根を這ひくだる尾越しの雲のさむけくもあるか

木履（タマンコ）の材とはあれか直立ちの木立あらはに岡の上に見ゆ

岩波氏訪問三首

友を訪ひて行く道にしてかたじけな小馬車に人の乗せてくれたり

忙はしかる君を訪ひ来し心なき身をかへりみてさびしかりけり

新　月

夜明けどきゆまりに出でてゆくりなく蝕（むしば）む月を我が見たりけり

カンピーナス郊外の野菜作りに転業せんとす

静かなるこの山里を立ち出でて街の近くに住
まむ我が身か

米作りやめてはるばる此の里にトマテ作ると
来りやけるかも

鋤き返へす畑のへりの雑木山日に日に芽ぶく
春となりけり

春霞の遠山見れば恩ひ出づるミナスの春の野
べぞ懐し

春靄のこめてぬくとき月夜なり背戸のあたり
に梟のこえ

にごり水はやき野川の片岸に流れよりゐて茂る布袋草

ユーカリの並み立つ向うの丘の背に湧かなむ雨雲（くも）を待ちに待てるも

木の下に鶏は交めりしろじろと蜜柑の花の咲ける裏庭

今朝の春

鳥追ふと米田の中に立ちて居り雨降りしきる米田の中に

夕されば幼心もさびしきか父よと呼びて縋りつく児は

次男

とり出でしこの拳銃の筒の錆ひさしくも我が手にせざりけり

いねざめの心果敢なき夜なりけり通る夜汽車の汽笛の長鳴り

しめやかに雨降れるなりいねざめの耳に親しき雨垂れの音

古年の仕事つかれか元日と思へど起きむ心おこらず

かけ替へし部屋の額さへ見るからにもの新らしき今朝の春かも

ふり繁き雨に阻まれ野良仕事つかへしままに
年明けにけり

しかすがに正月なれや村肝の心ものどに朝寝
してけり

ひるの茶を飲みつつ今日が七草の日であるこ
とを思ひ出でつも

ふる雨の町の火明りここにまでさして灰かに
庭あかるめり

手作りのものにしあれど家財道具ふえゆく見
れば楽しかりけり

## 街ゆ帰りて

サンパウロの街ゆ帰りてしみじみと田舎住ひをよしと思へり

語りつつ折々我を見やりますいや静やけき君がまなざし

坂根領事送別会

しみじみと親しき心傾けて君と交はすも文芸談を

やうやくに君に会へりし嬉しさに唄ひたりけり安来節を我は

あづまやに居向ふ人の肩越しに見えて静けき睡蓮の花

しかすがに女子なれや土瓶の茶空しくなれば
入れて釆たれり

正月にふさはしからぬ此の国のこの蒸し暑さ
雑煮食し居り

この国は安けかりけり年暮（くれ）といへど借金取り
の来ることもなし

年の瀬のうら楽しさや野良仕事今日はやすみ
て餅をつくなり

畑裾の薮のしげみのさ揺ぐと見れば山猿の枝
伝ふなり

森の道よぎり行きつつはしなくも木伝ひ遊ぶ小猿を見たり

ひとところ薮のしげみの揺ぎゐて其処に遊べり小猿の群は

## 朝の牧原

朝露の牧原ゆけば巣ごもりの鶉とび立つ音に鳴きにつつ

すごもりの鶉鳴き立つ朝つゆの牧原越えて竹を伐りにゆく

暮れませるトマテ畑に水引きてひとりし居れば寒けくもあるか

暮れ近きトマテ畑に水引くと水堰き居れば五位さぎの鳴く

引き了えしトマテの畝のたまり水ひと筋白し夕闇の中に

頼みがたき人の生身やあさめしに帰れば妻の病みて悩める

急性盲腸炎

病み妻を入院せしめて静心なき明け暮れを子等とすごせり

昨日の日に開腹手術をうけしとふ妻を思へば安けくもなし

ひそかにも我が怖れゐし禍事のこの貧しさの中に起れる

病み妻を病院に入れて帰り来つ心果敢なき夕べなるかも

## 絶　壁

ここにして憩ふと見つつ親しけれ遠山脈は靄はだらなる

聖州とミナス州との境なる尾根の高きに馬鈴薯（いも）を作れる

絶壁の崖下道をわが自動車（くるま）過ぎると見れば汽車も過ぎれる

見はるかす広野のはての山脈の嶺かけて今日は雲の下りたる

小夜更けを帰り来りて湯を浴びる湯殿のすみのこほろぎの声

春の田の径を先行くサラクーラ振り返り見ては急ぐなりけり

草の山

夕づく日遍きうらの草の山みるからに冬のいろ深みたる

今日も来てトマテ撰別りゐる納屋先の木々明るくも芽をふきにけり

流れゆく野川の面の蜂の巣に時折白く魚跳ぬる見ゆ

子にゆまりさせつつ見やる杜の背のほの明るきは新月（つき）落ちしなり

この朝は霜置けりとやうべしこそ昨夜はわけて寒かりにけり

新年の雨の朝明けめざめゐて聞くくたかけの声のはるけさ

朝山を越えて聞ゆる汽車の音何か親しく聞きて我が居り

岡山を越えて聞ゆる汽車の音モジアナ線の朝汽車の音

霧探き朝をくりやに茶を呑みて居ればま近に
山鳩鳴くも

立ち出づる街の家並の外れより朝ぎりふかき
森ぞ見えたる　コンキスタ

しづしづと柩かきゆく日盛りのプリマベーラ
の散りしける道

風いでて背戸の木立の騒ぐ音さびしく聞きて
い寝るなりけり

朝焼けて

ぅっり来し家の近くに夜もすがらけららころ
ろと鳴く蛙かも

サラクーラ頻り啼けるは岸のべの蒲生に風の
騒げるあたり

棚雲の下べ明るく朝焼け七明けゆく空や雨近
きなり

たまさかに女児が葬りて挿す茎長のコツポ・
デ・レイテの白妙の花

さやさやと吹く朝風にさ揺れつつ若木の桃の
花ざかりなる

裸木の庭木の中の桃の木の花咲く見れば故国（くに）
し偲ばゆ

# 我が土地　昭和二十三年―昭和二十九年

## 山　里

ここが我が遂の住所か吹き寄する夕霧さむき
此の山里が　　土地を求む

霧さむきこの山里に家居して棲みはてなんか
吾も吾妻も

凝りし肩子呂にたたきて貫ひをり思へば我も
年寄りにけり

仮住まふ藁屋ぬらして降る雨の音聞き居れば
コウロギなくなり

家建てに今日は疲れぬ向うには夕風呂を焚く
煙あがれり

道すがら妻と挑むる菊治氏の家には桃の残り
花白し

竹薮になかば隠れし菊治氏の家の戸口は此方
に向ける

背戸のべの樹に鳴く鳥のセンフインの声絶え
間なく夜は更けにけり

竹群にい群れて鳴けるカナリヤの声親しくも
聞えくる朝

聞ゆるは家居ま近の竹群にめざめて鳴けるカ
ナリヤの声

汚れ水流るる裏の溝べにはコツポ・デ・レイテの花咲けるなり

## 裏　山

みんなみの山押し隠し吹き下る山霧さむく夕べとなれり

一人ゐて雹傷しるき屑トマテ撰る小舎隅にこほろぎの声

ひとしきり雨降り止みて日が差せり頬白の鳴く我が裏山に

恋しくて児が住む方を眺むれば連り長く雲流れくる

次男農事講習に赴く

永住のつもりで移り住み居れど斯く作物の出来悪くては

生計がここでは立たぬと土地売りてこのモジ
の地を友は去りゆく

絵を描くといつか貫ひ来し色鉛筆そのままにし
て書柵の隅に

秋ばれの四方の山べの美しさよパウ・デ・フ
ロルの花さき盛り

## 夜　霧

雨垂れの繁きに聞けば降りしきる夜霧は雨に
ふり代りたり

畑つもの安くて家計立たざれば鶏を飼はむと
心をさだむ

育雛舎見廻りくれば裏山の背に傾けりいびつ
の月は

雛の餌の大根の葉を刻み居り斯かることとする
も幾年振りか

冬ながら日射しぬくとき山に来て竹を伐り居
ればセンフィン鳴くも

末枯れの我が庭先に冬ばらの花はつはつに咲
けるこのごろ

狭霧ふる前の山べにセンフインの来鳴くを聞けば冬は来にけり

陶器性の音

移り来し比の国にはや十六年百姓をして悔ゆることなし

百姓の業に併せて鶏を飼ひすなはち得たり生活の安定

飯炊ぐ末の女童あほれみて釣瓶の水を汲みて我が置く

次女範子

どの株も下葉素枯れて豆菊の花黄に咲けるうらの庭隈

よる夜半鶏舎に灯ともし鶏どもに産卵増加を
無理やりにさす

碇泊の汽船（ふね）さながらに明々と灯火つけて横た
はる鶏舎

採卵の籠の卵の触れ合ひて立つ陶器性の音の
さびしく

馬もよく屁をひるものか厩近くひねもす仕事
し居れば響く

## 新　屋

新屋の門の右と左にはやをら植ゑたり竜舌蘭
を

涛声居

宵月のひかりさやけく出でて見る庭木はすでに黒き影せり

農村の不景気も深しそこここの若木のユーカリ伐らるる見れば

金を貸せと言ひはせぬかと思ひてか金の乏しさ言ひ居り友は

黄に咲けるイペーの木を伐り来たり鶏舎の垣根の柱にしたり

結ひてゐる割竹垣のその上に霧の晴れ間の夕月ぞ見えたる

霧深き背戸の山べに鳴く鹿の声きこえ来る夜の更けにして

# 秋

我が村をめぐれる山の木のみどりうつらふ見
れば秋は来りぬ

眺めやる四方の山べの木々の色次第に褪せて
深みゆく秋

いさかひをすることもなし妻も吾も互に老い
て頼り合ひつつ

総入歯とりて寝入れる妻の顔しみじみ見れば
小皺増えたる

巣の箱に草しき居れば我が肩に頭の上にとび
上る鶏

呼ははれば走り来寄りてうずくまる鶏の愛しさ抱き
上げてやる

巣の掃除すると来りて鶏舎ぬちに鶏と遊べり
思ふことなく

月朱く出で初めにけり程近く水禽をりてふく
み音に鳴き

滝つ瀬の音たまさかに遠のくはこの月の夜の
風変るらし

思ひ屈し我が居る前を自動車（くるま）してゆく人達の
愉しげなさま

## 海岸山脈

耕して物作るのみが百姓の栄ゆる道と思へるかあはれ

なりはひの其の重点に乳牛を置くたてまへの我が農の道

鶏を飼ひてゐる年代に成木になさむと果樹も年毎に植う

眺めやる冬ぞら遠く連りてながめ果てなし海岸山脈

嫁ぎゆかむ娘をし想へばさびしくて明け白みくる軒見てゐたり

雅子の婚約成る

間作に麦つくりしはよかりしが出来晩くして
後作遅る

乳牛（うし）飼はむ意慾に燃えて働けば此の世の中の
いや明るくて

登り来て見れば低地の丘かけて延び拡がれる
此のモジの街

聴き居りて

まつ暗な夜の部屋隅に一日の仕事づかれの重
き靴脱ぐ

許婚（ゆる）されてある愉しさを愉しみて還り行くは
や笑み返しつつ

竹男

聴き居りて我はも愉し雨あとの裏山に鳴くセンフィンの声

稲妻のひかりに見れば前栽に咲き群がれりマルガリーダの花は

厠べに花咲き白き此の南天くれにし人は老いぬ呆けしとふ

爽竹桃咲き出でて嬉し鶏を飼ふあひ間に挿木して置きしなり

我が老齢（とし）を思ひさびしみ交らへる若やぎにほふ処女等の中

鶏の水二た罐提げきて息苦し心臓狭搾症といふにあらぬか

土掘りて死雛を埋む我も斯く葬られなむ時きたるべし

好物の大根の葉漬食し居れど歯岸病みゐて噛みあえなくに

## 病床吟其他

病む部屋の屋根裏淡く白めるは霧雨（あめ）ながら射せる月明りなり

家人の笑ひさざめく声聞きて我は寝て居り腹痛くして

寝て居りて目につく書架の我が蔵書ストリンド・ベルヒの「結婚生活」

癒え近き躯はトーストパン食べをり朝光みなぎる青山（やま）に向ひて

厨べに辿りかかれば昨日飲みし下剤の空瓶壁ぎはにあり

残り餌のカデロンに容れて我が持てる今朝初産の小卵二つ

云ひ難くはれたる秋の夜半の空南十字星も眼界に見え

吹き降りに濡れたる鶏舎のつまの壁乾きかかればまた雨となる

陰惨な雨後の夜の月見て佇てりゆまりをすると出でて来りて

病後

足をもてまさぐり下る洞窟の底ひかそかに水走る音

モジ市郊外サンタ・テレジンニヤ

## 白雲の海

人出でて仰ぎてやゐむ谷あひの農家の上を今し翔びゆく

おもむろに機翼の下に現はるる国原とはく米みのりたり

朝日光機翼にうけて翔りゆく我が機の下の白雲の海

自雲の張りひろがりてゐるところ翔び来て見れば山脈の上

雲の中に我が機下降りしと思ふ間に淡々として見え来る市街

サンパウロ

寒々と我が機の下に肱がれるしやぼんの泡の如き白雲

垣根にはコロア・デ・ノイバの花白く我が娘の嫁ぐ日も迫りたり

二鶏舎灯し来れば月落ちてただ横雲のへり明るめり

鶏舎ランプみがき終りて見惚れゐる湧き立ちのぼる夕茜雲

パラナには木材多しと聞きゐしが見ればまこ
とに壁も板張り

囀り

雲の影移らふ向うの馬鈴薯（いも）畑この頃とみに青
くなりたり

高まらむ血圧思へは塩鰯貫ひて喰ふのもひか
へめにして

鶏黒死病（ペスト）予防せむとてリモンむく夕風呂の火
にあたたまりつつ

愛しみて我が聴きすぎし囀りに後の童め石を
投げうつ

自生なるトマテ今年も栄えゆくパルマの花の
紅き溝べに

とどろきて旅客飛行機とほりゆく雛らの寝藁
我が切り居れば

大輪のばら淡紅（とき）色に五つ咲きふかき曇りの孟
蘭盆けふは

夕霧は谷間に蒼く沈みゐて澄みとはるサツポ・
サパティロの声

入浴の前にゆまりをする癖となりて今宵も庭
木の下に

## 白き州道

吹きなびくユーカリ並木の相見ゆる吾が破璃窓の左下隅

病臥中

薄月の白き州道行き居るにセンフィンは鳴く行手の杜に

黄なる月出ではなれたる横雲の右に左に走るいなづま

辛うじて出でしぶどうの稚な芽を日にいくたびも来ては愛しむ

白々と花咲きながら秋蕎麦は1のりたるらし雀らたかる

脱柵の鶏ことごとく追ひ込みて見る夕空の雲はうごける

## 木　履

たたなはる山脈見放けて下る坂片側はまだ朝の日差さず

娘は何を思ひけむやにはに木履脱ぎひたひたと裏の庭走りゆく

範子

眼界の入道雲を照り透しいなづまのする月の夜にして

鶏舎の棟に若き野鳩がよりそひて羽根つくらふを見て佇つしばし

起き出でし旅寝の朝のすがしや汽車の排気の
音もきこえて

雨近くなりたりおぼろ月の夜のいづくともな
く稲光りする

下りて来し汽車の前灯（あかり）に照らされて過（よぎ）り
てゆ
くよ暗き踏み切り

押されつつ

混むバスに伯人女に押されつつ心卑屈になり
て居たりき

三人の男が手を振りいがみ合ふ交通整理信号
灯の下

我が家にひける電気の柱立つ湿地の中にさける白花

昏れゆくに妻を助産につれに来し人を秘かに我はにくめり

たのまれて助産にゆきて帰らざる妻の枕を片よせて寝る

漂ふがごとく鶏の毛ひかり翔ぶ今張り終へしアンテナの上

ジャカランダの花紫にけぶる街友の婚儀に来りて通る

諸国の国旗にまじりて日の丸の旗もはためく
草土手の上

ビエナール展三首

仰臥婦の恥部には毛まで描けるに此の裸体画
の清潔感よ

「逆光の佐世保港」の絵中央の山は記憶にある
赤崎岳

宵越しの卵みがきてゐる鶏舎の下屋隅にして
鳴く朝蛙

町の芥を肥料に花井を作りゐてすえる嗅ひの
するこの部落

うら庭の桃の木越しに差す朝の光りは風呂場
の壁にあたたか

ひさびさに妻帰り来といふ日なり裏の桃の木
花ざかりにて　　初産の娘を手伝ひて

見ゆる限りは

二月九日　マイリンキの中山氏の新居を訪ふ

ゆきに行けど見ゆる限りは一本の木らしき木
もなき丘陵にして

ゆるやかに波紋は岸によりゆきて里芋の倒影
をたまゆら乱す

庭めぐりせむと出で来し門口の燃ゆるはかり
の緋衣草の花

ぶどう園の道を上れば左手に三つ峰の高山が
潤みて見ゆる

みんなみはいくらか眺望展けゐて観ればさびしき丘の重り

豆提灯吊り並めしごと咲き居りて心惹くプリンコ・デ・プリンセーザの花

白ききのこ

群がりて白ききのこの生えてゐる雨の屋外後架の戸口

天日あてて養鶏飼料部へ我が返す混合粉餌空き袋百枚

死に近き人に会はむと発ちくればイタペチ山は暮れはてむとす

十字星横向きになりゐる下の入道雲にいなづましげし

けづりても削りてもまた生ひ茂る庭のよもぎを悪みて削る

友の訃を我が聞きし時咲きてゐし糸蘭の花もすでに素枯れぬ

窓下は機翼の鋲多きところにて其処に文字あり　ＮＡＯ　ＰＩＳＥ

つれだちて泳ぐ仔鯉の体触れてすゐれんの花たまゆら傾ぐ

## 灰皿に

灰皿にたばこ燻ゆれり正治郎哉太郎君らが今し帰りて

飛行機がとほれば想ふたづさへて君と行きにきパラナ歌会に

岩波氏追慕二首

ひけめある人の如くに目を伏せて対話してゐし晩年の君

いつとなく我が家裏のユーカリより剥れて落つる雲形の皮

苑の道歩みきたれば枝つめし菩提樹ありて樹液たらせり　プ・プルデンテ公園

道端の榔子にも居りて鳴く蝉の多き朝なり町に出でゆく

## 死の像

昏々としてゐたる間に我が前の処女下りゐてさびし夜のバス

雨さむき今夜もスヰツチ入れられて音立ててゐる揚水電機

あふのけに胸に掌をくみ寝て居りて思ひ描ける我の死の像

いでて来し我が門庭はつゆけくて其処にも此処にも稚ななめくぢ

肩並めて歩みまはりし夜のふけに手を執りて
別る低き門の前

誘惑をこえて純潔保ちつつ思ひとげ得し想思
の二人　　映画

宿の夜は既に明けゐて軒下をはたらき人の駅
にゆく音

# 後記

歌集を出すようにと幾年も前から友人連から勧められてゐたのですが、幼稚なものを曝すことの怖さに出したい希盟は持ちながら今日に至って什ひました。しかし、私も七十歳を越えた老人となり、命数も残り少くなりましたので、この辺で思切ることにし、編んだのがこの「白き州道」であります。この題名は集中にある一首中の語句であります。

本歌集に収めた作品は、短歌を作り始めた大正十年から昭和二十九年まで、実に三十四年間の作品のうちから五百八首を選んだもので、私の幼い処女歌集であります。(第二歌集も次いで出したいと思ってゐます)

三十四年といへば私の境涯の半ばに、近い年数ですが、如何に生活に追はれる身の上であったとは云へ、此の長い年月の間にたった五百八首しか載せるものが無い自分の非力さが今更ながら嘆かれます。

集録した短歌の中にも稚拙なものが多々ありますが、今日となっては如何ともすることが出来ません。大正十年は、青春の日もとっくに昏れた私の二十九歳の年に当ります。で、青春時代の作は一首も有りません。このことは、私にとっては誠にさびしいことです。

私は、九州の一角、彼杵半島の寒村に生れました。生家は農家でした。

家運の傾いた家に生れた私は幼にして苦難の道を辿らねばなりま

せんでした。事情あって二人の継母にもかかりました。
学業の希ひはすべて叶はず、僅に私立の工科学校を苦学によって卒へただけであります。若くして機械製図工となった私は、佐世保の海軍工廠を振出しに東京大阪と転々しました。この間、洋画家として立ちたく絵の勉強をした時代もあります。
若い頃から文学書は漁って読みました。趣味は書と絵画です。失職して昭和八年四十一歳でブラジルに渡りました。現在は、サンパウロ州モジ市郊外に果樹疏菜の栽培を行ってゐます。
大正十年千葉県八幡町に棲んでゐた時、病を得、静養中新聞歌壇によつて歌作を始め今日に至ってゐます。
歌歴は、若山牧水選の新聞歌壇投稿に始まり、昭和三年前田夕暮主宰の「詩歌」に社友として参加、夕暮没後同誌同人となり、現在は「まひる野」の会員の末席を汚してゐます。又、サンパウロ発刊の「椰子樹」の会員であります。
私の作歌理念は、短歌はどこまでも三十一音律の抒情詩であることを建前として、自然と人間の心との絡み合ひの中に詩を求め、出来るだけ平易な言葉で何人にも判るやうな写実主義の短歌を創りたい、つまり、霊峰富士に例へれば広い広い裾野である大衆の中に短歌を位置づけたいといふことであります。

本集の作品を年代的に見れば初期から中期に属するもので、目次の＜静樹＞から＜大地＞までが日本での揺藍時代の作、＜渡伯＞以下がブラジルでの作であります。この中に戦争中の作品を入れるべきですが、一首も入れられるものがありません。

これらの私の短歌は、人事よりも自然に取材したものが多く、人間嗅に欠けてゐますが、日本での自然詠とブラジルでの自然詠とを読み比べて頂き、多少でも読者に興趣を覚えさせるものがあれば望外の悦びであります。

本歌集出版に当っては窪田章一郎、橋本喜典の両氏、伊藤幸子さんにお世話になりました。記して深く感謝いたします。

昭和四十年一月一日

サンパウロ州モジ・ダス・クルゼス市郊外の寓居にて

瀬　崎　涛　声

歌集　白き州道
まひる野叢書１７

昭和四十年四月　五　日印刷
昭和四十年四月十五日発行

定価　六〇〇円

著者　瀬　崎　涛　声
発行者　伊　藤　幸　子
東京都練馬区中村北四ノ一五
発行所　新　星　書　房
電話東京捌四六八五番
振替東京八五〇六二番